

会話教育を考える - 教養教育科目「口頭表現 ・ 」の授業から -

梅岡巴香

要旨

一橋大学の教養教育科目、「日本語選択・口頭表現 」「日本語選択・口頭表現 」は、前者が中級後半レベル、後者が中級から上級への口頭表現を学ぶクラスである。初級を終え、中級で学ぶ学生が中心となる「口頭表現 」では、語彙の増強と初級文法運用が課題となる。また、「口頭表現 」は、細部を聞き取ることにより、日本語の発話と聞き取り能力の向上を測り、プレゼンテーションの練習による、聞き手を意識した日本語使用がポイントである。

授業では、これらの練習を具体化することで能力向上を図ると共に、学生が発話する際に自らの発話を意識化、対象化することが必要と考える。

キーワード 口頭表現 語彙 聞き取り 聴衆への配慮 日本人学生

0 一橋大学教養日本語選択科目「口頭表現 ・ 」

一橋大学で学ぶ外国人留学生のための科目として、5つのレベルに分かれている基本科目（2003年度は4レベルで開講）がある。留学生たちは学期初めのプレイメントテストの結果で自分のレベルにあったクラスが決められる。さらに各基本科目のレベルによって、読解、文章表現など、昨日別に分かれた科目があり、これらは選択科目となっている。この選択科目の中に口頭表現のクラスがあり、「日本語選択・口頭表現 」「日本語選択・口頭表現 」「日本語選択・口頭表現 」の3段階になっている。

本稿では、2001年度夏学期から2002年度冬学期までの4期に担当した、「口頭表現 」および「口頭表現 」の授業について報告し、さらに2003年度担当予定の同科目についての取り組みを紹介し、留学生に対する日本語教育における会話教育を考える土台としたい。

1 クラスレベル（対象学生）と学習目標

5つ（4つ）の基本科目に対し、口頭表現は3レベルであるので、学生は教師の許可を得て、基本科目で指定された以外のクラスを受講することもある。そのため、「口頭表現」のレベルは学期によって多少差が生じることもあるが、これまでの4期は、以下のような学生が多く受講してきた。

1.1 「口頭表現」

このクラスは日本語初級段階を終了し、中級で学ぶレベルの学生たちが受講する。初級終了段階と一口に言っても、受講生によってばらつきが見られる。主に下記の3つのタイプに分けられる。

- A タイプ 半年ほど前に来日し、日本で基礎から積み上げた学生。
比較的聴解力があり、日本語のみで行われる授業についていける。
文法がほぼ満遍なく定着している。語彙は初級レベルで、生活語彙は少ない。日本語はまだ流暢ではないが、正確な日本語を話そうと試みる。
- B タイプ 自国で基礎を学習した学生。開講約1ヶ月¹から2週間前に来日するが、Aタイプに比べて、聴解力・会話力が低く、語彙が乏しい。初級文法が完璧とは言えない学生もいる。
- C タイプ 過去に来日歴があり、ホームステイなども経験しているため、聴解力もある。話すことへの意欲は高く、コミュニケーションに対して積極的。初級文法はほぼマスターしている。

学生の過去の学習歴はさまざまであるため、学生の身分によって決めることはできないが、Aタイプには、本留学生センター日本語研修コース修了生(以下、センター修了生と略記)が多くみられ、提携提携校の交換留学生(以下、交流学生と略記)などはB、Cタイプであることが多い。しかし、どのレベルの学生も共通して、日常生活のためにも日本語学習の必要性が高く、授業到達目標を統一しやすい。その項目としては、以下の二つがあげられる。

語彙の増強

初級文法の理解と活用

初級文法で学ぶ語彙は、数の面で生活においてもまだ十分とは言いがたく、日本語でコミュニケーションをとるにはさらに多くの語彙の習得が欠かせないのは当然といえる。

A、Cタイプの学生は日本語の「音」に慣れてきている。しかし、新たな音として現れると、学んだはずの初級文法まで新しいものと感じるようである。特に初級後半の文法である受身、使役、敬語等は、学んでからこのクラスに入るまでの日が浅い学生がいることから、完全に理解・使用可能なレベルまでにはなっていないことが多い。初級文法が不完全な学生の場合はもちろん、このクラスでこの「穴」を埋めていくことは必須である。

「話す」ことは発信作業であるが、「口頭表現」の役割として、文法の復習を積極的

¹ 夏・冬学期のそれぞれの開始前に約3週間の日本語集中コースがある。参加は任意で、レベル別に3~4クラス開講される。自国で初級日本語を学習して来日する留学生(主に一橋大学との交流協定校の学生)は、一番下のレベルのクラスに参加するが、半年日本で勉強した学生とのレベル差が大きく、授業への参加が難しいこともある。

に取り入れることにした。語彙や新しい表現を学ぶ段階で、文法は避けられない。語彙の習得は語彙だけで行われるのではない。目や耳を通した外界からの情報は、「文」の単位で発話されることもあるから、クラスでの練習も文単位での発話を通して、文法定着と新出語彙の学習を積極的に行う。

「話す」練習は、単純に「発信」作業というものを想像しがちだが、意識的に文単位の日本語を理解して初めて、運用できるようになると考える。

Bタイプの学生の場合、その伸びは、学生自身の積極的に文法を学習する態度によるところが多い。初級文法が定着しないと、次のステップに移ることは難しい。教師から見れば、文法が無視され、「いい加減な日本語」であっても、ある程度周囲の理解が得られるため、生活には困らず、日本語学習がこの段階で終わってしまう学習者も見られる。

学生によっては、「理解できること」は「聞き取れる」ことであり、「運用できること」でもあるという錯覚がある。大意が取れることや、自分の意思を正誤は問わず伝えられることを目標に掲げることもできるが、今後の伸びを考えた場合、文法に留意しながら、「正しい日本語（文）を用いるようにする」「細部が理解できるようにする」を目標に掲げるのが良いのではないかと考えた。

1.2 「口頭表現」

学習暦が1年以上の学習者で、日本語能力試験2級レベルの学習者が多い。単語のみ、あるいは短文レベルでのレスポンスも早く、生活語彙も「口頭表現」に比べて多い。日常会話のレベル（内容）であれば、日本人の自然な速さの日本語でも、理解にあまり支障はない。初級文法には問題がなく、中級文法も運用しようと心がけている。しかし表現にはまだ多くの誤りが見られる。

受講生の中には、自国²で初級レベルまでの日本語を学習してきている学生もあり、初級レベルの語彙・文法ともに問題が少ない。しかし、当然であるが、日本語母語話者との交流の少なさから、表現が不適切であることが多い。たとえば、「経験をもらった」と流暢に発話しつつも、それが不正確ではないかと感じている、といったものである。

このレベルになると、ごくまれにはあるが、語学学習の得意な学生は、簡単な発話であれば、丁寧体と普通体（友人同士の会話に用いることば）を使い分けることができる。また、その意識を高く持ち、自らそれを使おうとする意欲も見られる。

学生の多くは、「物事の説明」「自分の意見」などまとまりのある日本語を、的確に発信したいという目標を持っている。

² 一橋大学との交流協定校からの留学生であるが、その交流協定校に留学中の学生という場合がある。彼らの中には、出身国で日本語を学習してきている学生と、留学先で学習してきている学生とがいる。

1.3 聴解

一橋大学の日本語選択科目の中には、「聴解」だけを学習するクラスはなく、基本科目の中に部分的に組み込まれているにとどまる。「話す」と「聴く」は、互いに欠くことのできない表裏一体の能力であるから、口頭表現のクラスで聴解に時間を割くことが必要である。

学生たちは、「口頭表現」力の向上をめざしてこのクラスを受講する。しかし、能力向上のために、多くの日本語を聞く - input が必要であることを、あまり意識していない学生が多いようである。

「聞く(聴く) - input」というのは、決して「受身」に徹するわけではない。それが土台となって、「話す - output」につながるわけである。実際の生活の中で、知らぬ間に日本語を耳にし、いくつかの表現や語彙を学んでいるはずである。これを意識的に授業の中で行い、限られた滞在期間の中で身につけさせるようというのが、口頭表現における「聴解」の目的である。

「聴解」の練習には、大意を取る練習と、細部を聞き取る練習があるが、「口頭表現」も「口頭表現」も、後者を取り入れた。

2 授業内容

2.1 「口頭表現」

2.1.1 テキストに基づいた授業

学習到達目標を考えた場合、学生も指導する側も「拠り所」となるものが必要かと考え、市販されているいくつかのテキストを使用した。

限られた時間の中での意味の理解と、定着のための練習には、当初の予定よりかなりの時間を要した。その理由としては、下記の二つに関して、個人差がはげしいことが挙げられる。

未知の語彙と文法の理解

の運用、および既知の語彙・文法面の総合運用練習の到達度

口頭表現は非常に個人差が大きい分野といえる。初級文法が未完成な学生はもちろん、理解が十分な学生でも、正しい運用までには、口頭練習がかなり必要である。

「口頭表現」は、「初級文法を使う」という部分が大前提になることは1でも触れたとおりであるが、テキストを使用した学習の部分では、新しい語彙・表現を提示することも心がけた。

本人の意志次第で日本人とふれあいが可能である日本在住の留学生たちは、多くの日本語を耳にする機会がある。そのひとつが「短縮された形」である。文法的な縮約形から、助詞の省略、文章レベルの短縮化などさまざまであるが、学生たちがそれをそのまま自分の日本語に受け入れてしまうわないように配慮した。

場面シラバスのテキストを用い、そこに出される語彙や表現を練習したこともあったが、この段階には達していない学生もこのクラスを受講することがあるため、必要以上に時間をとられた。そこで2002年度は、あえて短縮形を学ばせ、そこに出される例文にある初級文法を思い出させ、語彙を増やすことを同時に行った、これだけでも、かなりの時間を要することとなった。また、語彙を紹介することはできたが、その語彙と初級文法の復習をかねた運用の時間はほとんどなくなってしまった。

2.1.2 聴解

聴解の学習目標は「詳細を聞き取る」としたが、クラスではニュースなどの生教材を使用したので、時間の関係からもある程度は「大意を聞き取る」ことをしなければ、内容を楽しめない。大意がわかった段階で、いくつかの文を取りあげ、ディクテーションをさせながら、詳細を聞いていくという、「口頭表現」とほぼ同様の方法をとった。(詳細は2.2.1を参照)

生教材は、日本人同士が話している日本語を教材としたが、その発話の1文1文が短いものを選んだ。

2.1.3 ショートプレイ

1回だけであるが、プロの演出家書き下ろした短い脚本をお借りした。途中の一文を工夫することによって会話の流れが変わることを教える、演出家養成のためのものであるが、学生たちは「相手に配慮して話す内容を考える」という点に魅かれたようである。

普段は自国語で行っているはずの配慮を、日本語という外国語によって客観的に知ったらしく、コミュニケーションに関する勉強になったようである。

2.1.4 音読練習

学習歴、滞在歴の長さに反比例して、発話時の文法が乱れる学生のために行った。短い会話の音読である。発音、イントネーションなどに注意を向けさせ、一文をよどみなく読めるようにする練習である。これができないということは、自分で文を作り発話することはできないことになる。こちらも1回だけの練習で、あとは自宅練習とした。

2.2 「口頭表現」

学生の希望を聞くと、まず出されるのが「プレゼンテーションの練習」である。専門の授業を意識してのことと思われる。

「口頭表現」では、新しい語彙を増やしていくより、頭に蓄積されたものをどのように発信していくか、という点に重きを置くこととし、学生の希望もあわせて、主に以下の2点を授業に取り入れた。

2.2.1 聴解

受講するほとんどの学生が、1年程の滞在(交換留学生)や、研究生であるからか、専門科目の授業が聞き取れず非常に困っているという聴解に関する緊急の問題は抱えていない。インターネットの普及により、自国語などで時事ニュースに触れられるため、閉ざされた世界にいるというわけでもない。テレビドラマを見ても視覚情報に救われて7~8割は理解していると言う。つまり、大意を理解するには問題がないのである。

一方、細部は聞き取っているのではあるか。聞き取れたと思う文を自分の言葉で再生させてみると、正しい日本語にならないばかりか、内容的にも不明解であるのが、このレベルの「聴解力」である。聞き取ることができれば、再生(リピート)できるはずであり、それができるということは、正確に聞き取っていることである。理解したものを自分が消化していれば、正しく再生できるはずである。「聴解」と「発話」は表裏一体だということを、学生に自覚してもらうことがまず、最初の作業となる。

細部を聞き取るには、どのようにすべきなのか。それには、ひとつの教材を繰り返し聞かせることである。

空欄のあるスクリプトを渡し、大意を取らせながら、ディクテーションをする。

どの程度聞き取れたかを確認する。 学習者の言葉で再生させる。(同時に、聞き取れていない音があることを自覚させる)

聞き取れない音(たいていは未知の語彙)を確認する

文全体の意味を確認する。(教師の説明、母語での訳、学習者同士の確認など)

意味が取れたところで、再度全文を聞く。

聞いている文よりやや遅れて(文を追いかけながら)復唱する。

発音、イントネーションなどに留意し、完璧にできるようになるまで復唱する。はじめは、スクリプトを見ても良い。

スクリプトを見ずにできるようになったら、一文を聞き終わった段階で繰り返す。文を聞かずに、自分の言葉で再現する。

これまでに使用した教材は「子供ニュース」の特集から録画した「日本の伝統芸能 能・狂言」についてであった。最初は「子供が聞く」ニュースだから簡単だと思っていた学生たちも、子供用に噛み砕かれているはずの日本語であるのに、まず一文の長さや速さ、内容の難しさに圧倒され、自分の日本語力を実感するようである。また、理解したはずの内容であっても、それを自らが再生するには、数回の繰り返し練習では足りないこと、それが1週間あいてしまう³と、また再生できなくなっていることにも気づく。

³ 「口頭表現」などの選択科目は週1回の開講である。

内容を理解するむずかしさと、思うように再生できない日本語に疲れきってしまうので、実はこのような聴解練習は、本人の根気が必要で、クラス形式でレッスンを続けていくことは非常に難しい。それを継続させるために、実は日本人学生が非常に大きく貢献してくれたことがあった。これについては、3で触れる。

2.2.2. プレゼンテーション

一橋大学の留学生たちは、専門に関しては日本人と同等レベルである。ゼミ等で、日本語というハードルさえ越えられれば、あとは自分の専門分野である。その意味で、留学生たちが自分の専門に関連した日本語能力向上を希望するのは、当然といえる。

そのような期待を込めて、日本語でのプレゼンテーションの練習を希望してくるため、2000年度以前に基本科目を担当していたときから、「話す」練習として、プレゼンテーションを取り入れてみたことがある。担当するクラスに欧米系の学生が多かったせいか、人前で話すことに関して、躊躇する学生は少なく、積極的に自分で調べたことなどを発表したいという希望が多い。

クラスの人数と授業回数の関係で、グループワークとし、集まる学生たちの専門にはばらつきがあるため、テーマを自由に決めさせることにした。しかし、こちらが考えていた日本語以前の問題がいくつか出てきた。

テーマ決定に必要以上の時間がかかる

「Aが知りたい(知る必要がある) Bを調べた Cがわかった」という一連の流れがあって発表に至るが、Aの段階で、最低でも2回分の授業が削られた。

調べたことに対する分析ができない

Aが決まり、クラス外で調査を行い、そこで集めたデータを分析しないと、発表(報告)にならない。Aの段階で、何を目的として、何を調べたいのかが明確ではないため、日本語力とは無関係のはずのデータ読み取りに時間がかかる(Bの段階の調査がどうしても小規模であることも理由のひとつではあるが)。

また、自分で調べたデータが日本語の場合は、それが読めていないという日本語の読解力の問題が感じられた学生もいた。

レジュメが作成できない

調べたものをグラフにし、それがレジュメとなるのが、ほとんどのケースであった。タイトルはもちろん、発表者の名前もなく、調査動機・調査方法・分析など、文で書かれるべきものは何一つない、というレジュメもめずらしくなかった。

さらに、ひとつひとつの日本語に文法的な誤りがあるものも見られたが、レジュメを作ることが先行すると、過去に学んだはずの日本語文法は忘れられてしまうかのように思われる、単純なミスも多く見られた。これはむしろ「書く」日本語力の問題である。

以上、 から までの反省を踏まえ、効率よく進めるために、 のテーマ設定と、それに

関するアンケート用紙の準備までを教師が行い、時間内で調査結果の計算を終えさせた。そして、レジюмеには何を書くのか、という説明まで行って、レジюме作成からスタートし、発表の練習をさせた。

ここで見てきた問題は、発表者自身の日本語の問題というよりも、聴衆を理解させようという配慮に欠けているという点であった。説明の必要な内容が検討されず、聴衆が理解していないものの説明がない、使用語彙も聴衆の理解を考えない、また、スピードやアイコンタクトなどにも、聞かせようという姿勢が見られない、などである。

ある学期では、教師が用意したテーマを終えたあと、自由テーマで行いたいという意見が出された。すでに専門分野を学んでいる交流生や大学院生などは、テーマを持っているのでさせてみたが、ゼミでの発表がそのままクラスで行われてしまった。日本語の専門用語は、日本人には専門外の者にも理解される範囲の語彙であっても、留学生にはまったく未知の語彙・表現である。

コミュニケーションをとるとき、お互いの共通理解が必要になる。知り合いだから共通理解があるというものでは決してない。ある出来事について話すとき、一緒に体験した友人とその話を思い出して話すなら状況説明は不要だが、家族であっても、発生した場所や時間、状況などから話し始めなければならないのは、当然である。

日常自国語で行っているはずの配慮が外国語ではできなくなる。外国語を話すというのは非日常的行為である、という点を見落としていたことが、指導する側の大きな反省であった。

プレゼンテーションの練習は、2003年度から「口頭表現」に組み込まれることになったが、談話レベルの練習でも、このような「聞き手への配慮」という点は、学習者に意識させなければならない事項である。これをどのように練習するかが、課題である。

3 新しい試みとその問題点 日本人学生 クラスのゲストとして

プレゼンテーションの練習テーマとして、学生の関心が高いのは、日本人学生との交流に関するものである。滞在が1年以上の学生でも、日本人との交流は意外に少ない。この問題が多いと感じていたころ、日本人学生のクラス⁴を担当している教官から、授業参観の申し出があった。ちょうど2.2.1で触れた「子供ニュース」の伝統芸能に関するニュースの聴解をしていた時期で、留学生が聞き取った日本語を数回繰り返すという練習を行う日が参観日となった。日本人学生が複数参観することになっていたのも、留学生の口頭練習に、それぞれ参加してもらうことにしたのだが、これは意外な効果が見られた。退屈な繰り返し練習も、日本人が1対1で対応すると、やる気が出るようである。また、「伝統芸能に

⁴ 社会学部の開講科目「日本の社会と文化」についての日本人学生のクラス。

関してよく知らない」という日本人学生たちに対し、自分が言えるようになった日本語を用い、正しく説明ができることで、急に練習のモチベーションが高くなったようである。留学生たちは、繰り返す練習を生き生きと日本人学生相手に行っていた。

これを機に教室外での日本人学生との交流もできればという思いも生まれ、このことがきっかけとなって、知り合いの一橋大生や、日本人学生の授業を担当している専任教官に頼み、日本人学生に授業への参加を求めた。

3.1 授業内容とその問題点

日本人学生は、学部1年から大学院生までさまざまで、男女比はほぼ半々であった。

3.1.1 「口頭表現」

2002年度の夏学期に行ったのは以下のふたつである。

練習問題をやる

留学生は日本語の表現を体系的に学びたいと思っている部分もある。いわゆる「おしゃべり」の中から学んだものであっても、それについての文法的な疑問を抱えていることも多い。日本人学生は母語話者であるだけであって、「説明」をしてくれる人ではない。当然のことではあったのだが、教師とともに「学ぶ」部分と、日本人学生を交えた「練習」の部分をしっかりわけておく必要があった。

また、「練習」は留学生個人個人がそれぞれの学習スタイルを持っている場合もあるので、回数を増やして日本人学生に相手をさせても、「練習」にはならないこともある。

専門分野を語る

まず、留学生同士のペアで専門について語りながら、必要な単語の準備をさせた。それから日本人学生とともに、専門の異なる相手に説明するという練習を行った。

学生の多いクラスでは、「話す練習」にはなりにくい。留学生同士の練習では、間違った日本語でやりとりする練習になってしまうし、母語話者が教師一人であれば、1対複数の会話となり、発話回数が減る。ひとことでも多く発話させようという配慮から、日本人にクラスに参加してもらい、留学生と1対1のペアを作ったが、それは必ずしもプラスとは言えなかった。

会話には「トピック」があるが、教師ではない母語話者にとっては、日本語の正誤を見分けることは非常にむずかしい。内容が先行し、その理解に支障がなければ「よし」とするわけである。また、年齢の若い学生であると彼ら自身の日本語に問題があり、間違った日本語を使っていることや、留学生の間違いにはまったく気づかないということもあった。

また、日本人学生の参加回数を増やしてしまったために、留学生は疲れてしまった部分もあった。

留学生たちは、日本人学生と机を並べて受講する専門の授業の中で、日本人と「戦って

いる」ことがあるようである。それは、専門知識においては、日本人学生にも引けをとらないが、語学力の点で劣等感を持ったり、緊張したりするということである。そのような中であって、同じ日本語レベルの仲間がいる、このような日本語のクラスに参加することで、精神的にリラックスしながら授業が受けられると感じていることもしばしばあると聞いた。日本人との練習回数が多くなりすぎると、留学生たちは逆に行き詰まりを感じ、思い切り日本語が話せなくなるという、心理的側面がある。

何よりむずかしいのは、留学生も日本人も「生身の人間である」という点である。「気があうかどうか」というのは、練習に大きく左右しかねないだけに、マッチングは日本語教師の力量を超えてしまうと感ずることもあった。

3.1.2 「口頭表現」

このクラスでも、まず「口頭表現」同様に、以下のことを行った。

専門について語り合う

「口頭表現」では、単語の確認をさせたあと、留学生同士の練習なしに日本人学生と対話をさせた。

このときは、参加した日本人学生が学部1年であったのに対し、留学生が大学院博士課程や、研究員という専門レベルの高い学生であったために、日本人側がその内容についていけないという予期しない問題が生まれた。

クラスに日本人がいることは、留学生の練習相手になってくれるので、教師はその対話状況を客観的に見ることができるという大きなメリットがある。

しかし、いつでも、どのような内容にでも対処できる人材を確保できるわけではない。留学生の授業に参加してくれる日本人と教師との関係が密であれば、教師は授業内容に応じて助けを求めることができる。また、新しいゲストが来ることで、さまざまな日本語に触れさせることができる面も持ち合わせている。そのため、日本人確保は、どのような観点から行えばよいのか、例えば、初対面の人と話すのか、知り合いと話す練習かなどの、練習内容とも関連してくる。

ミニディベート

2002年度冬学期のみ、日本人学生の参加を得て行った。いくつかの対立する問題を列挙し、ペアごとに選ばせて意見交換をさせた。学生たちは非常に活発に話をしてしたが、ここでまた、「発表練習」と同様の問題が出てきた。

「男女共学高校がいいか、男子(女子)のみの学校がいいか」を選んだペアでは、互いに自分の体験と自国の文化に関係する点を主張したために、話し合いが平行線に終わったというのである。また、「家族旅行がいいか、友達との旅行がいいか」というトピックも、自分の経験だけ取り上げ、相手を納得させるための一般的な見方を取り入れることができなかつたようである。つまり、「自分の意見を相手に理解してもらおう、相手の意見を

相手の視点で見る」という配慮が欠けていたことが、ここでも表れてしまった。

3.2 新しいチューターシステムへの提言

さまざまな問題は生まれたが、概して日本人学生の授業参加は、学生たちに刺激を与えられたと感じている。

キャンパスで出会った日本人との雑談と授業での日本人との交流の大きな違いは、教師の存在である。「いつでも質問に答えてくれる人がいる」というのは、学生にとって大きな強みであるようだ。歩く相談室がそばにいても言えればいいだろうか。

今回の日本人学生集めには、専任教官の助けが多かったが、日本人学生たちの日本語クラスへの参加がシステム化できるとよいかもれない。⁵

4 2003年度への課題

「口頭表現」では、昨年度と同様、「語彙」の増強と「聴解」を行う。そしてそれを活用し、初級文法を正しく運用していくことである。運用には、学生独自の発話の機会が必要である。既製のペアワーク練習用テキストも多く取り入れるべきである。2002年度冬学期に好評であったショートプレイや音読練習も積極的に取り入れることを計画している。それぞれの練習で、単語レベルの発話から文レベルの発話へという意識を持たせることが重要である。

「聴く」ことにおいて大意がわかってしまうと、次のレスポンスの段階で、文を不完全なまま返答しがちである。これは母語話者が、「意味」を取ろうとするあまり、学習者の不完全な日本語を勝手に補ってしまい、それで会話が成り立ってしまう。それにより彼らの日本語は修正されないままになってしまうのである。

授業では、不完全な文をなくすよう、心がけることも必要である。文は、不完全でかまわない場合と、それではわからない場合がある。教師もこの点を見落としがちである。

「口頭表現」では、まとまりのある日本語を話させること、聴衆に配慮することが重要である。聴衆への配慮を欠かさなければ、既知の語彙・表現が場面や相手に適切かどうかという判断を行えるようになり、同時に、未知の語彙の習得の必要性も生まれてくるはずである。

5 結びにかえて - 今後の研究課題として

「母語話者のように流暢に話したい」という願いは、外国語学習者の永遠のものなのかもしれない。既知・未知の人を問わず、人とコミュニケーションをするためには、「話す」

⁵ このように日本語クラスに参加してくれる日本人学生を「クラスゲスト」とし、登録制度をとっている大学もある。

ことは全ての始まりといっても、過言ではないであろう。だからこそ、外国人日本語学習者が何よりも求める能力であるといえる。しかしそれでいて、文法や漢字学習よりも到達目標や学習方法が定めにくく、その道のりが長い学習の分野である。

「口頭表現」に続く「口頭表現・」は学部留学生にも単位取得可能な科目として開講されているせいか、受講生が多いと聞く。教師から見ても日常会話に困っていない日本語（会話）力のある学生の受講希望が多いのはなぜであろうか。彼らが求める会話力は、生活に困難を感じない日本語を習得すること、講義がわかることだけではないということは確かなようである。

「口頭表現・」は、スタートラインである。「点数」でその能力が換算できない科目ではあるが、学習者が自分の成長を確実に感じ、新たなステップに向けて自らが常に前進できるように、彼らを導き、送り出す教師として、具体的な学習方法を提示していかなければならない。

2003年度は、前年度までの反省などから導き出された目標を基に、それが達成できることで能力向上が目に見えるかたちになるような教授項目を設定したいと思っている。